

受容された佛教の在り方、一般民衆と懸け離れた上層階級に依存する佛教なり、其の性格、即ち修功德の爲の佛教であつた所に其の原因があると思うのである。従つて、宗教の在り方、佛教の在り方がどう言う風な具合でなくてはならぬかに就いて、こうした元の宗教から明の佛教への推移の間に何かを教えて呉れるものがあると思うのである。

古佛教における國家觀

高野山大學々長
文學博士 中野義照氏

しばしば、佛教は現實に對する關心が薄いといふ非難がなされる。しかし、もとより佛教思想は現實社會の動きと無關係なものではあり得ない。インドにおいて、初期の佛教は國家社會を如何に見たか、が今の私の課題である。

インドの社會を構成するものは、①内容的に言へばカストの制度及び組合（諸種の職業組合・宗教上の組合など）の組織であり、②地理的に分かつて都市・村落・森林が多少づつ文化の層を異にして存在する。①と②との構造を含んで、ある時代にある國家が成立することとなるのである。

この様なインドの國家・社會の様相について、梵書までのバラモン文獻が描く所は極めて空想的であるにも拘らず、（その成立が第四世紀を過らぬと考へられる法典・家庭經よりは確かに時代的に先立つ所の）初期佛教文獻におけるそれらの記述は

甚だ寫實的具體的である。佛教は出世間的な悟りの教であると同時に、一面またインド社會を導く強力な國家思想・社會思想をもつてゐたに違ひないと考へられる。佛陀の誕生した時代が、まさしくインドにはじめて國家らしい國家或いは國家聯合が出現した時代と合致してゐたことはその一つの因由であつたであらう。

初期佛教時代のインドは、所謂十六大國が並立してゐたが、その中、マガダ・コーサラ・ガンサ・アヴンティの四王國が強大であり、特にマガダは最も富強を誇つてゐた。共和國として特筆すべきはグッジーである。グッジーは八國の聯盟より成る共和國で、中でもヴィデーハとリッチャヴィの上部族が有名である。この國は第四世紀の頃まで約八百年に亘つてインド史上に盛名を留めてゐる。このやうな古代諸國家のそれぞれの氣風、それぞれの性格は、後々、インドの地にさまざまな廣大な國家の興亡が繰返されたにも拘らず、永く失はれずに保持されて行つたのである。

さてグッジーの如き共和國を *sarajya* と呼ぶ。佛教がその教團を *sarajya* と呼稱したのは「組合」といふ語から採つたのである。しかし、「組合」を意味する語は數多あるのに、その中に「共和國」なる意味をも有した *sarajya* の語が選ばれたのは注意すべきことである。それについて阿含大般涅槃經中のグッジーの七法の記述は重要である。佛陀自身共和的精神の持主であり、共和國に存在してゐた種々の制度や種々の仕方を取り用ひて僧伽の制が定められた、と考へ得るのである。

佛陀後二三世代を過ぎてアレキサンダーの侵冠を迎へた頃か

ら、インドの國家・社會は急速に發展した。この頃、統一國家を念願するインド民衆の氣持を反映して、佛教徒の中から生れた、と考へられるのが、轉輪王の思想である。佛教思想は本來共和國的で王國的ではないが、かかる思想を生んだのは時代の要求であつた。轉輪王は、又にもぬらず法によつて四海を統一し、法を貴び法を旗印とし、すべて法によつて行動する理想の王である。これは思想としてはアショカ王に先立ち、王の出現によつてその理想が現實化されたものと考へられる。

研究者によれば、アショカの法勅中の法の觀念にはジャイナその他の思想が導入されてゐるといはれるが、王の事蹟こそは、佛教の教團理念を世界におよぼし行つた具體的な例であると考へてよい。法勅には、戦争の否定・信仰に基づく家庭と社會の道義の實踐・信教の自由・動物愛護・受刑者に對する懇意などの人間的理想が高らかに謳はれてゐる。

またわれわれは律典などの中に佛教僧伽の精神を讀み取るこ

とができる。僧伽の生活は、人類平等・男女同權・正見に基く正しい生活、即ち、佛教の正當なる理念に基く道義の確立とアニミズムなどの似而非宗教の否定、の實踐の生活であつた。行政は純粹に共和的であり、刑罰の精神は懲罰刑的でなく教育刑的であつた。六物以外の私有を許さず、財物はすべて教團の共有であつた。

この様に高い精神的立場に立つた僧伽の秩序は、ただ教團の内部に行はれたのみで、一般社會に對しては説き示されなかつた如くである。それは何故であるか。おそらくは、それを先づ以て教團の中に確立し、その成績がおのづからに一般社會に押し及ぼされることを願つたのではなからうか。そして今やわれわれは、現に、現代インドが、マヌやカーウティリヤの理念にあらずして、佛教の理念によつて導かれんとしつゝあるのを見るのである。(文責在記者)